パンドラの箱

シャム猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パンドラの箱

【Ｎコード】
Ｎ４２１６Ｚ

【作者名】
シャム猫

【あらすじ】
音楽室で拾ったハーモニカから幽霊が出てきてとりつかれた少年の笑いありバトルありの物です
趣味で書いてるシリーズです
作者の機械音痴で二回くらい消えてしまいましたが再びリリースしました

何事も初めが肝心（前書き）

お詫びと訂正
この度はこの小説を読んで頂きありがとうございました
機械音痴のせいでこの小説を二回くらい消えてしまいましたが飽きずに投稿しました
どうかお楽しみください

何事も初めが肝心

1

プロローグ　はるか昔のお話

「……！……！」
誰かが大声で叫んでいる
暗くどんよりした空を背景に誰かが私を上から覗き込んでる

「う……。」
頭がずきずきする
左手でおでこをなぞる
温かい液体が手にかかる

「鬼の呪いか。大丈夫すぐにに解くからなおい！早く！こっちだ！」
男が大声で叫ぶ
頭に緑色の布を巻いており目は青い顔には濃い髭にいく筋もの傷跡がついてる

「あ…ああ……」
燃え盛る家血の海で倒れる人々その中を走ってくる白い袴を着た人が武器や治療箱を片手にこちらへ走ってくる

「医者が来た！もう大丈夫だ！」
ひげ面の男が叫ぶ

「…なら…いいか……」
安心して目を閉じる
「おい！待て！そーゆんじゃないから！目を開けろ！おい！グバ！」
私は鬱陶しく思いその男を殴った

第１話　何事も最初が肝心

初めまして俺の名前は神谷光太郎今年の春にこの聖フランチェル学園の一年生になった
今は珍しいキリスト教を教える学校で朝から聖書を読み学校には現職のシスターや神父がいたりするような学校だった
授業が始まって一週間ロシアからの転任教師のガラチョフが黒板に図を書いている
「いいかお前ら！拳銃弾の初速は５０から６０ｍくらいで最大射程範囲は２００ｍくらいだよく覚えておけ！」
なんで速さの問題を拳銃弾で例えるのだろうか？
呆れて外を眺めてるとどこから音が聞こえた。
（何だ？）
どこか曇ってるが澄んだ音が聞こえてきた
（綺麗な音だな……）
その音を聞いていると「ボッーとしてるんじゃない！」とガラチョ

フ先生からの教科書アタックを食らった

★　★

昼休みになりお弁当を広げると

「神谷、神谷大変だ！おもしろい話があるんだ」

席にお弁当と共にやって来たのは腐れ縁の大石暁海小学校の頃からの付き合いで今までの付き合いでわかったのは人付き合いが上手でおもしろい反面凄く面倒くさい人なのだ

「何だよ話って？」

「多分、今学園中で噂の『音楽室の幽霊』だろうな」

隣からもう一人男子生徒が話しかけてきた

「風見君僕の話をとらないで……」

暁海がショックを受けたように震えた声をだす

横から暁海の話をかっさらったこの人はもう一人の腐れ縁風見瑛太

短い黒髪にクールな容姿だが若干曲がった猫背に少し回りからはずれた発言そしてその目は何だか濁ってる残念系美男子の部類である

「噂なら学園全体で囁かれてるからな知らない人はいないだろう」

知らない俺は一体？

「私も知ってるよ。その話」

今度は女子が話しかけてきた

「やっぱりまどかも知ってたか。」
佐藤まどか中学の時転校してきたハーフでアメリカ人モデルの母を
もち日本人の父が
おり母の美しさが引き継がれた美少女だ

「学園中で噂になってるよ。逆に知らない人はいないよね」

「だ、だよねー知らない人はい、居ないよね……うん」
心臓ってこんなに大きく音が鳴るのだろうか？

「確か、音楽室で自殺した女の子が化けてでるって話だろ。」
風見が話し出す

「そうそう。確かハーモニカを吹いて現れるんだったよね」
まどかがお弁当を食べながら話す

「風見、お前怖くないか？」

「別にー昼間だし怖くないよ」
風見は昔からお化けとかそう言うのがダメなのだ

「ところでなんでいまさらその話を？」
と俺が聞くと

「いや、聞けばなんでもその幽霊を見た人は今までいないらしい」

「そうゆうもんだろ」

「というわけで今日その音楽室を探検しようと思います。」

「くたばれ」

「ちょ！風見君！首閉めんといて！死ぬ！死んじゃう！ぐええ！」
そこで力尽きた

「けど、面白そうだね」

「まどか幽霊なんていねーだろめんどくさいな俺はパスだ」
そう言ってそっぽをむく

「私も放課後は用事があるから無理だね」

「神谷はどうする？」
死者甦生した暁海が聞いてきた

「俺かウーム……」
その時さっきの数学の時のあの音が頭に浮かんだ

（もしかしたら……）

「俺もいくよ。」

「よし！じゃあ４時に特別教棟に集合！」
そう言って今日はお開きになった

第２話　夜中の学校に入るのって何だかどきどきするよね

午後４時生物室や音楽室等を集めた特別教棟の前に人影が二つ暁海と神谷である

「第１回！幽霊はいるのかな？大捜索大会！どんどんどんパフパフパフー」

「何やってんだよやめてこっちが見てて恥ずかしいから」
何だかテンションが高い暁海と冷静な神谷の二人だ

「そう言うなってんじゃさっさといこ」

「あいあい」
そう言って中に入っていった

★　★

「ここか……悪魔城は」

「いやちげーから！」
音楽室の前にものの１０分でついた他の部屋は違う意味で危ないから真っ先にここに着た

「さて開けるぞ」
観音開きの扉を開けようと振り向く

ギィィー

誰も手を触れてないのにひとりでに開く扉

「じ、自動ドアか……便利だね神谷」
「いや、これ木製だけど……」
「シャラップ！」
するといきおいよく俺を殴る
「あべし！」
「誰がなんと言おうとこれは自動ドア何だよ！何か質問は？」
「な、無いです」
帰りたい気持ちを押さえて立ち上がる
「中は普通だな」
普通の教室を少し広くして黒板の前にピアノを置いたような部屋だ
「何か金目の物は……」
「目的違うだろ！」
そんな感じでワイワイやっていること１０分
「おい、何かあったぞ！」
黒板の裏を探してたら何か光る物を見つけた
「何だ？何があった？」
駆け寄ってくる暁海
「ハーモニカだな。」

見た目は普通のハーモニカだが吹くところが黄色いお札で塞がれてる

「なにこれ？お札？」

「悪霊退散って書かれてるけど…剥がしちゃダメかな？」

そう言って手を伸ばす暁海

「待て！下手に破くな！」

「は、は、は、剥がしたい！これを剥がすために俺は生まれてきたんだ！」

「んなわけねーだろ！やめろ！」

お互い手でハーモニカを奪い合い俺がハーモニカを奪い取った

ビリリ！

紙を破いたような音がした

「あ、神谷お前……」

俺の右手にはさっきまでハーモニカを塞いでたお札がしっかりと握られてた

「……」

ショックのあまり呆然としてると

「おい！神谷！何か煙出てるぞ！」

指差す方を見るとハーモニカから煙がもくもくと出てた

「こ、これは……」

「何か、やばくね？」
暁海が身構える
しばらく煙が漂ってたがそのうち消えた

「…！誰だ！」
気配を察したのか後ろを振り向く暁海
するとそこには

「初めまして」
半透明の美少女がいた

そしてこれが人生史上最大の物語の始まりだった

何事も初めが肝心（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

交通事故ってシャレにならない（前書き）

機械って難しいです

2

第3話　寒がりな金縛り

「う…ん……」
その日は体の重さと体のダルさで目を覚ました
はっきり言って目覚めはさいやくだ
何だか変な夢を見た気もするから気分の悪さが割り増しされてる

（なんで…こんなに体が重いんだろう？）

不思議に思い起き上がろうとすると

（あれ？手が動かない）
それどころか足も動かない

「どうなってるんだ？」
何とか動く首を動かすと

「すやすや……」
半透明の美少女がこっちに顔を向けて眠ってる

……

しばらく思考回路が停止した

「よー神谷。おはよー」
あくび混じりに上のベットからおりてきたのはクラスメイトであり同じ部屋で寝泊まりする大石暁海サイヤ人のような寝癖をかき回している

「夢じゃないのか……」
暁海が疲れきったように呟いた

「……俺も思ったよ。取り合えず幽希さんを起こしてあげて」

「ああ、金縛りか大変だな」
そう言うと暁海が俺の上で気持ちよさそうに寝てる幽霊を揺すり起こす

「……ふぁーあ…」
長い黒髪を背中に流し起きたばかりのその目は眠そうだ

「おはようございます……」
猫の用に伸びをして挨拶をする

「幽希さん頼むから俺の上で寝ないで金縛りに合うから」
やっと動けるようになった体で伸びをする

「私が金縛りをかける事によりあなたが殺人容疑がかかってもアリバイができるんですよ」

「俺はダメダメ弁護士か！ハーモニカで寝てろよ！」
なんで知ってるんだろ？

「幽霊でも雪女とかにならない限り寒さには弱いんです。金縛りは幽霊が『寒いから布団に入れてくれや！』っていう合図なのですじゃなきゃ風邪を引いてしまいます」
腰に手を当てて言い張る

「なんで封印を解いてしまったんだろ」
後悔と共に昨日の記憶がよみがえってきた

第４話　契りの詔（みことのり）

「……え？」
いきなり前に現れたら女の子をまじまじと眺める
腰に届くくらいの長い黒髪にスラッと伸びた身長は俺の肩ぐらいの背丈で全身白い浴衣のような服を着ている

「どうしましたか？」
不思議そうに首をかしげてる美少女を見る

「えっと、名前は？」

「幽希霊子です幽霊歴２１５年です。あなたが封印を解いてくださったんですね。」
幽希さんが俺を見る

「え、えっと解いたっていうか解けちゃったの方が正しいかな？」
お札を破いたのは事故だし、第一暁海にも責任の一端はあるはずだ、逆に暁海が破くのを防ごうとしたんだから俺は無罪だ

「よし、理論防御は完璧だ！」

「何が？」
隣で暁海が不思議がってる

「何にせよ破けたお札を持ってるのはあなたなのであなたにとり憑くしかありませんふつつかものですがこれからもよろしくお願いします」
そこで頭を下げる

「まてまて俺は何も悪くない！」
慌てて否定すると

「諦めが悪いですよ。」
そして音も無く近よる
至近距離から幽希さんが俺の目を覗き込む

「ちょ、ちょっと！幽希さん？」

「生者の息吹きで死者が立ち死者の魂を洗い清める者なりたる。汝我と長い時の間の誓いを守りますか？」
幽希さんの真っ黒い綺麗な瞳がこっちをじっと見つめてくる
お互いの息が解るくらいの至近距離で見つめ会う
美少女と見つめ会っていると何だか胸がどきどきしてくる

「ち、誓います。」
気がついたらそんなこと言ってた

★
★

「はぁぁぁ……」
海底二万マイルより少し深いため息をつく

「それより神谷さん学校は良いのですか？時間が……」

「はい？」
時計を見る
短い針が８に長い針が４を指してる
隣には「先にいきます」と暁海のメモ書きが置いてある

「あああああああああ！！！」
慌てて鞄をつかみ食堂のオバチャンの料理をピットインのサポーターより速く食べる

「走ればまだ間に合う！」
昔から足の速さには自信があった

第５話　スクーターは安全運転で

「わ、忘れてた……俺は…短距離走者だった……ハァハァ……」
学校まであと走れば５分の距離で時間は８時２７分。３０分までに付かなくてはいけない。

「……あれ？計算が合わないぞ？」

「現実逃避より走ればいいじゃないですか遅刻しますよ。」

「チクショー！」
叫びながら走り出す

「神谷が走ってる間に解説しよう！なぜ神谷が遅刻したのか？それは神谷にとりついた幽希さんからでるマイナスオーラが神谷に流れ込み神谷さんは人二人分の不幸を食らってるわけである。ちなみに幸運は神谷一人分です。」

「おい、今のだれだ？何か歌舞伎のあの真っ黒いアシスタントさんみたいだけど。」

「学園にいる式神の黒子（くろこ）ですねこの物語の説明や解説をしてくれます。」

「……そんなんもいるんだ」
もう驚きを通り越してあきれ始めたのがわかる

「て言うか俺は二人分の不幸を担がされてるって本当？」

「黒子は嘘を言いません。」

「マジかよ、だから今朝から何かついてないのか」
長いので割愛したがここまでに石につまずいたり落ち葉で滑ったり野良犬のケンカに巻き込まれたり色々ありました

「はい、ちなみに女の子です。」

「マジっすか？けど何だか男っぽい声だけど……」

「蝶ネクタイ型の変声機を使ってるんですよ。」

「違うだろ！」

どんな名探偵だよ

「よし、あと少しだ！」

学校まではあと１００ｍくらいだ

曲がり角に出ると「あぶねーぞ」と気の抜けた声が聞こえた。

ドガシャン！

その瞬間果てしない青空が見えた

空ってこんなに広いんだ

ドガッ！

「グオバッ！」

は、跳ねられた……原チャリに

「おいおい、あぶねーだろいきなり飛び出したら」

跳ねといてそれはないんじゃないかな？

相手の顔は見知った人

「く、工藤先生……」

犯人の足を逃げないように掴む

目の前で離脱準備をしてる細目の中年オヤジは工藤大騎（くどうたいき）我がクラスの現代国語の先生であり年中やる気とか使命感なんてものとは無縁の生活を送ってる

「離してくれや俺1時間目から授業あるんだよかったりーなーフケちまおうかな？」
とても教師には見えない
高校生前に平気でくわえタバコをしてる
「先生…それ、多分僕のクラスです。」
「あ、マジで？んじゃこの鞄持ってって」
ブッ殺すぞ！この怠け者が！
本気で殺意が沸いた
「んじゃーねー鞄よろｒｙ」
「まてー！この殺人鬼！」
あのやろう全速力で逃げやがった
数分後無駄に重い工藤先生の鞄を持って教室に入ったが授業はとっくに始まってた
二人分の不幸は本当に厄介だと思った

交通事故ってシャレにならない（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

秘密は長くは隠せない（前書き）

やっと消えた分は更新しました
これからもご愛読よろしくお願いいたします

秘密は長くは隠せない

深夜未明特別教棟の音楽室

「あっれー？変だなハーモニカが無いな？どこだー？」
一人の人が音楽室をうろうろしてた
頭から黒いローブをすっぽりと魔女の用に被ってる

「黒板の裏に隠したのに……誰かが持ってったのかな？まさかね。」
アッハッハッハッハッハッ

「けど、実際無いしどうしよう？」
しばらく考える

「まあ、調べてみるか。」
そしてそのまま少し笑いながら部屋を出ていく

★　★

早朝５時ごろ

「またかよ……」
神谷がため息をつく

「すやすや……」
彼の上に幽希さんが眠ってた

「……起きろ」
殺意を込めて目の前の非常識な幽霊に怒る
「……おはようございます。」
彼女が起き上がりあくびをする
「毎日言ってるだろ！ハーモニカで寝てろよって！」
体をほぐしながら抗議する
「……だって退屈でしたから……。」
下をうつむいてぼそぼそしゃべる
ちょっとカワイイと思ってしまった
「それよりウノをしましょう」
カードの束を取り出す幽希さん
「一人でやれ。」
5時からやってられるか
しばらく布団に潜ってると
「1枚～2枚～3枚～」
背筋が凍るような低い不気味な声でなにかを数える幽希さん
「6枚～7枚～」
（……メッチャ恐い）
「8枚～9枚～……1枚足りない……」

「やめろ！皿数えるのやめろ！」
慌てて布団から出る
「皿？ウノのカードを配ってました。」
「紛らわしい！」
思わずベットから落ちちまったぜ
「1枚足りないってのは？」
「飛んでってしまったカードがあったみたいです」
カードを1枚持ち上げる
……くそっ何だこの敗北感
「幽希さんの声は凄いな。何だか負けた気分だよ」
上から暁海がくまを作りながら降りてくる
「現役幽霊だからな」
幽希さんが俺にとりついてはや一週間未だに進呈はない
「そういえば幽希さんは俺たち以外の人には見えるのか？」
「この学園内ならどこにいようと私を見ることが出来ます。」
リバースカードを出す
「なんで？」
暁海が7のカードを出す
「実は学園には強力な結界が張ってあって幽霊とかそういう類いが

実体化してしまうんです」

「まじでか」
知らなかった

「そういえば幽希さんは何かできるの？」
ドロ４を出す暁海

「例えば？」
幽希さんもドロ４

「人を呪ったり物を浮かせたりとか」
俺を不幸にしたりとかな８枚も引かされたぜ

「ひとしきりは出来ます。しかしあの日を境に力は使わないって誓いましたから。」
悲しそうにカードをドロー

「あの日？」
暁海がカードを出す

「はい、それに……」

「それに？」
何だか深刻そうだ

「働いたら負けだと思いますから。」

「完全にただのニートじゃねーか！」

「ただのニートじゃないニート探偵だ」

「リアルな死者がなに言ってるんだよ！」

完全にただの働かないダメな幽霊だ

ガチャリ

いきなりドアが開いた

「二人共そろそろ学校……あれ？」

「神谷君学校いこ……う？」

ノックも無しに入ってきたのは風見とまどかの二人いつも学校には一緒に行ってるから来るのは当たり前かだが幽希さんとばっちり合ってしまった

……

静かな沈黙が5人（うち一人は幽霊）に流れた

秘密は長くは隠せない（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

謎のキャラって何だかかっこいいよね（前書き）

グダグダですがどうぞお楽しみください

謎のキャラって何だかかっこいいよね

「えっと……その…」
俺と暁海の二人しか知らない秘密幽霊がいること
秘密にしなくてはいけないがもう早速二人にばれた

「そうだったのか……成る程成る程」
風見が納得したように頷く

取り合えずいままでの経緯を風見とまどかに説明し終えた所

「普段なら『イカれたのか』って思うがこうも実物があれば納得出来るな」

「よかった。てっきり二人がいたいけな女子高生を二人係で恐ろしい事をしてるのかと思っちゃったよ」

「まどか君。君は俺たちを何だと思ってんだよ」
呆れた暁海がツッコむ

「変態？」

「違うよ！」

「そうだぞまどか」
おお、いったれ風見

「神谷は変態と言う名の紳士だよ」

「さらにたちが悪くなってるよ！」
風見がかばうから変だとは思ったが

「まあ、幽霊でよかったよ」
まどかが笑いながら立ち上がる

「そろそろ学校だからいこ」

「そうだね」
そして鞄を掴み幽希さんの入ったハーモニカをポケットに入れる

「あん…もっと優しく……」

「ああ、ごめん」

そして扉を閉める

★　★

「成る程彼らか……」
男子寮の屋上に3人の人がいた
身長はバラバラだが3人共頭から雨合羽のような黒いローブを頭から被って顔を隠してる

「しかしいきなり当たりが来るとはね私の日頃の行いが良いのかな？」
3人のうち寝転んでる人が話す

「盗聴器仕掛けたかいがあったね」
さらっと凄いことを言う
「盗聴器仕掛ける人のどこが行いが良いわけ無いでしょう」
「理解不能です」
「常に君達は私に冷たいね……いつもどんな風に私を見てるんだい？」
よっこいしょと立ち上がる
「変人」
「魅魑魍魎（みちもうりょう）」
「ウグッ！」
胸に手を当てて肩膝をつく
「イカれた人」
「同じく」
「……君達が私の事をどう思ってるのかよくわかったよ」
半泣きになりながらも立ち上がりローブをとる
背中まである長い銀髪にモデルの用に整った顔をしている
涙で潤んだ目は暗い灰褐色だ
「まあいいや。それより報告報告」
耳に着けた小型無線機を外しケータイを取り出す

二匹のカラスのキーホルダーが鈴と共に揺れる

「ところで一つ聞きたいんですが？」

「このカラスの名前かい？上から太郎、小太郎と言って……」

「それは何回も聞きました。それよりなんで一人でも良いのに僕たちを起こしたのですか？」

「眠い……」

一番背が低いものがローブを払う

短い茶髪に人形の用に整った顔

その目はほとんど閉じかかってる

「だって……一人で調査するのはさびしいじゃないか」

最後に女優顔負けの笑顔

（ブッ殺したろか……）

それ位に無邪気な笑顔だった

「いい加減仕事とプライベートをわけてください。」

静かだがデリカシーのある人が見れば彼が怒ってるのがわかる

「仕事と遊びの両立は人類長年の夢なのさ！そして私の夢でもある！」

熱っぽく演説するが二人のブリザードの用に冷たい視線に耐えられなくなって話を変える

「それより二人共」

「なんですか？」
長身が答える
もう一人は立ったままスヤスヤ寝てる
「今朝は確か日直だった気がするんだけど……気のせいだよね」
銀髪の人が冷たい汗を流してる
「……そうですね」
嘘がつけない性格なのだ
そして寝てる子を引きずりながら二人で走り去る

謎のキャラって何だかかっこいいよね（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

俺はー！クーデレがー！大好きだー！（前書き）

サブタイトルは気にしないでください

病んだ作者の心の声です

俺はー！クーデレがー！大好きだー！

「あー疲れた……何だか物凄く疲れたよパトラッシュ……」
目の前で暁海が汚い野良犬に話しかけてる

「暁海。戻ってこい」
風見が野良犬から暁海を引き剥がす

「しかし、こんなに早々とバレるとはね」
俺がしみじみと話す

「なんかあったっけ？」
風見が不思議そうに首を傾げる

朝の出来事を短時間でを忘れられるのはある意味才能だと思う

「お前覚えて無いのか？あの、朝あったあれだろ……もちろん覚えてるよ……えっと…なんだっけ？」
ここにも才能の持ち主が

「幽希さんの事だよ」
しばらくして納得する二人

「呼びましたか？」
胸から紐で吊るしたハーモニカからスルッと出てきた

「そう言えば幽希さん。あなたはどうやって成仏するの？」

「……私がこの世に残した未練が晴れれば私は成仏します。」

「その未練は？」
それが解れば楽勝なんだけどな
「それは……」
かんっかんっ
「あれ？なんだあれ？」
緑色の楕円形の物体が曲がり角の向こうからこっちに向かって飛んできた
「あれは？」
なんだろう、昨日見た映画で特殊部隊が敵にあんな感じの爆弾投げてたような
……爆弾？
「二人共！伏せろ！」
風見に足払い食らって地面に伏せる（というか倒される）
ドカーーン
巨大な爆音の後顔をあげるとそこには巨大なクレータができてた
「……風見今のなに？」
鼻の痛みを忘れて風見に聞く
「Ｍ６７グレーネード米軍の使ってる手榴弾だ」
ミリオタの風見君目がキラキラしてます

「ちっ外したか」
曲がり角から一人の少女が出てきた
雨合羽の用な黒いコートを羽織り右手に黒塗りの拳銃を持ってる
（誰だ？この子）
（どこで銃を手に入れたんだろ？）
（ちっさ。小学生か？）
いきなり出てきた少女の身長は神谷の胸当りでその姿はギリギリ中学生位だ
「えーと何か用かな？」
「ハーモニカを渡せ封印する」
「どうしてそれを……」
バン！
「うわ！」
天に向けて威嚇射撃
「早く渡せあまり喋らせるな」
「神谷、ここは渡すか」
風見が提案する
「なんで……」

気づいた風見がめちゃめちゃ悪人顔になってる

「嫌なら俺が渡す」
ハーモニカを奪いウィンクを一つ

「受けとれ！」
そして上にぶん投げる

「！！」
相手に一瞬隙ができた
その一瞬をついて距離を詰め拳銃を蹴りあげる

そのまま拳銃は後ろにいた暁海に飛んでく

「じゃーねー！ばいばいきーん！」
上から落ちてきたハーモニカをキャッチする

「風見かっけー！」
素直に暁海が感動してる

「二人共逃げるＺＥ！」

『了解！』
そして俺達は反対方向に走った

俺はー！クーデレがー！大好きだー！（後書き）

投稿に実に１０日近くの穴が開きました申し訳ありません

ご意見ご感想お待ちしてます

良い子も悪い子も真似しちゃダメ（前書き）

あれ？短い

良い子も悪い子も真似しちゃダメ

「さて参ったなどうしたものか？」
体育倉庫の中で暁海が呟いた

「いきなり手榴弾投げられたりしたからねビックリしたよ。」
あの後走って逃げていったんこの体育倉庫に避難した

「そう言えば風見は？」
暁海が黙って後ろを指差す

「ベレッタＭ９２Ｆか弾は一発減って１４発……本物、実銃……ゲヘヘ」

「なんだ、ただの病気か」
風見のミリオタ魂に火が付いたようです

「さっきの奴は幽希さんを探してたもしかしたら幽希さんが何か知ってるんじゃないか？」
おお！ナイス暁海！

「ええ知ってますよ。」
早速問い詰めた

「本当！」

「あれはパラディン悪霊払いとかそういった類いの集まりです」

「実銃バンバンぶっぱなしてきたけどあれもそうなの？」

「パラディン一の特攻部隊炎●灼眼の……」

「おい！それ違うだろ！パクリだろ！フレ●ムヘイズだろ！」

あ、けど身長低いところ被ってるか

「本当は？」

「パラディンの暗殺部隊隊長の緋炎総詩」

「暗殺部隊……」

「学校にそんなものあっていいの？」

「表向きには生徒会を名乗ってますからいいんじゃね」

メチャクチャだな

「よく知ってるな」

表から澄んだ声が聞こえた

「噂をすればなんとやらだな」

そこには緋炎総詩がサブマシンガンを構えて立っていた

良い子も悪い子も真似しちゃダメ（後書き）

ご意見ご感想お待ちしてます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4216z/

パンドラの箱

2011年12月28日12時58分発行